

時間経過の見方の二重性と言語表現

Duality of the Passage of Time Impacting Language Expressions

東京外国語大学総合国際学研究院教授（情報工学）

佐野 洋

総合電機メーカーを経て、1996年から東京外国語大学に在職。東京外国語大学教授。日本語の分析を通じ日英語の比較対照に興味を持つ。現在、学長特別補佐として市民講座や募金等を担当している。

1 見方の二重性

1.1 時間経過の見方

時間が何であるのかは、その存在の証明を含めて極めて難しい問題として知られているが（[1]、[2]：226~254頁、[3]、[4]、[5]）、時間の経過は実測することができる。絶対時間の経過としてビッグバン以来、凡そ137億年ないしは138億年ほど経ていることを宇宙物理学は教えてくれる。最近では個人でも気軽に電波時計を着帯できるようになったが、時計が実用的な装置として社会に広がり始めたのは脱進機が発明された16世紀以後のことである¹。このように絶対時間としての時間経過を知覚できるようになったのは至極最近である。

実測して分る絶対時間の経過に対して、私たちは過ぎ去る時間を身体で感じるができる。心理時間である（[6]：42頁）。時計に内蔵された水晶発振器が振動するように、昼夜問わず体内で繰り返し運動をする器官、心臓の鼓動を頼りに脳で感じる時間経過である。その心臓は脊髄の延髄部分から延びた神経系と、延髄からわずかに下にある胸神経（胸髄）から延びた神経（生命維持の中樞部分）に支えられている（[7]：10頁）。脊髄の直ぐ上の間脳（視床と視床下部）は感覚情報を司る。それらを取り囲む辺縁系は情動や記憶に重要な役割を果たしている（[7]：15頁）。さらには、それら情動や感情、記憶に支えられて大脳皮質部分、とりわけ前頭葉で理性が働くという（[8]：83頁）。

¹ http://museum.seiko.co.jp/knowledge/type/escapement_01/

心理時間の経過は、表1に挙げるように2つに分けることができる（[1]、[6]）。私たちが実時間の経過として感じ、そして認識できるのは経験する現在での時間経過だけである。

表1 時間の経過

時間（経過）	絶対時間（経過）	
	心理時間（経過）	理性による抽象時間（経過） 経験する現在の実時間（経過）

ビッグバン以来の物理的な時間経過が絶対時間（経過）である。心理時間（経過）のうち、理性による抽象時間（経過）は、記憶や因果推論を使って脳で創造した時間の経過で、経験現在の実時間（経過）は、ヒトが感覚、知覚器官を通じて脳で経験する時間の経過である。

1.2 経験現在の実時間経過

感覚や知覚器官を通じて得られる刺激は、特別な細胞によって活動電位に変換され、神経網を通じて中枢に伝えられる（[9]：13頁）。神経網の長さや信号の伝達速度も違うことから、例えば、叩いたときに音が出るような同時に出来事が起こるはずのことなど、脳が推測をして感覚刺激と知覚刺激を整合させることで時間（間隔）調整も行っているという（[10]：85頁）。視覚情報は3次元情報で、私たちは静止画像を受容している。ただ、残念なことにはヒトは奥行きのある3次元画像（モノそのもの）を正確に視覚知覚できているわけではない（[6]：124頁、[10]：48頁）。実際、網膜は2次元情報を受け取る。眼球にあるはずの血管は見えていない

し、その代わり盲点領域は補完された映像で埋められている。ヒトは、概要を見ているだけだともいうし、動きは脳内で創り出したイメージであることが分かっている ([10]: 82 頁)。

感覚、知覚器官を通じて情報を得る際、情動を伴う ([7]: 25 頁)。情動は自律神経系と関係が深く、情動の移り変わりは、心拍数の変化や血液温度の変化をもたらす ([7]: 28 頁)。このようなモノに対する神経系の反応の違い (代謝速度の違い) から、時間 (経過) を早く感じたり、その逆に何度も時計を確認したりする。私たちの経験を通じて外界の物事が理解できるように経験現在の時間の経過は伸び縮みする。

1.3 理性による抽象時間経過

前頭葉内で間脳 (視床と視床下部) の背内側核から神経線維の投射を受けている領域を前頭連合野という ([8]: 71 頁)。ヒトで大腦皮質の 3 割を占めるといい、哺乳類の中では霊長類が大きく、霊長類の中でもヒトが最大である ([8]: 71 頁)。前頭連合野は外界から入力したあらゆる感覚情報を取り込むほか、辺縁系を經由して情動や動機付けに関わる情報も受け取っている ([8]: 76 頁)。前頭葉の損傷症例から「認知した外界の情報や記憶している過去の経験や情報をもとに、今置かれている場面でもっとも適切な行動を組み立て実行する働き」 ([8]: 83 頁) が前頭連合野にあると指摘されている。記憶とも関係が深く、当該部位の障害によってエピソード記憶を想起する際、時間的な順序に混乱が生じたり、内的情報への参照やそれら内的表象を操作したり組織化したりすることに障害が生じるともいう ([8]: 91 頁)。さらに問題解決能力が欠如し、計画性や自主性が喪失する。繰り返し行為 (運動性や感覚・知覚性) には障害が顕れず、合理的思考や推理する能力、いわゆる理性に支障が出るのだ。

ところで認知活動中に一時的に保存される記憶をワーキングメモリというが ([8]: 102 頁)、空間情報と非空間情報の違いで脳の前頭連合野の活性化部位が異なるという。それら部位も複数個所に及んでいる。実に多くの部位が時間の経過 (記憶) に関連している。

一方、長期の記憶、意識的に想起して言葉で報告できるような記憶には海馬体がかかわっているといい、前頭連合野と違って海馬体は大脳周縁系という比較的古い脳

領域に属している ([8]: 131 ~ 137 頁)。脳内の長期記憶にある内的表象への参照と、それらの組織化による時間配置は抽象時間の創造によって可能だ。そして計画性は未来における行動や活動を担保する能力であり、やはり抽象時間を創ることである。

1.4 時間の解釈

イマヌエル・カントは「純粹理性批判」の中で時間の二重性格を指摘した。その二つの性格は、記憶や予期や知覚によって生み出された観念存在と、経験を客観的に位置づけることができる実存在である ([11]: 4 頁)。前者が「超越論的観念性」で、後者が「経験的実在性」である。ジョン・エリス・マクタガートは時間が存在しないことを証明しようとする論文「The Unreality of Time」(「時間の非実現性」、[3]: 17 頁) で二つの時間解釈に A 系列、B 系列という名称を与えて議論している (表 2)。

表 2 二つの時間の解釈

時間解釈	直線的な時間認識 (過去——現在——未来)	A 系列 (抽象時間)
	包括的な時間認識 (より前とより後)	B 系列 (経験現在)

表 1 に対応させると理性による抽象時間 (経過) は A 系列であり、B 系列は、経験する現在の実時間 (経過) である。時間の流れの錯誤を詳説した大森荘蔵 ([4]) も運動の解釈のため 2 つの時間解釈を挙げている。なお、「経験現在」という表現は ([4]: 100 頁) から引用した。

山田孝雄は (日本語) 文法論の中で時間の解釈について言及している ([12]: 52 頁 ~ 55 頁)。それによると、いわゆる A 系列は主観に存在し時制は心に依存するという。そして B 系列の特権的な地位を山田孝雄は主張する。この主張は脳科学の見方と符合する ([6]: 42 頁)。恐らく、包括的な空間認識を基本として言語表現のシステム化が行われていると考えられる。

2 動きの創造

2.1 動きの解釈

時間を認識したり測定したりすることは、その経過を示す手掛かり、例えば、絶対時間の経過は時計の秒針の

位置変化を視覚的に受容することの手掛かりに拠っている。1.2節で述べたように、ヒトはモノの3次元情報を(2次元情報を通じて)外界から得る。感覚や知覚入力に応じて時間(間隔)調整も行っている。動きは直接には分からないのだ。動きは脳内で作り出したイメージであるから、動きは創造であり、それらは直接知覚できるモノの変化で表される。

物理学的に運動は物体の時空間(4次元)内における変化である(図1)。図1のボールを投げようとする男子の図は、個々が3次元空間を表す。図で示すように動きは3次元空間の連続するスナップショット(時間経過)であり、モノの時空間内における変化として表されるのである。

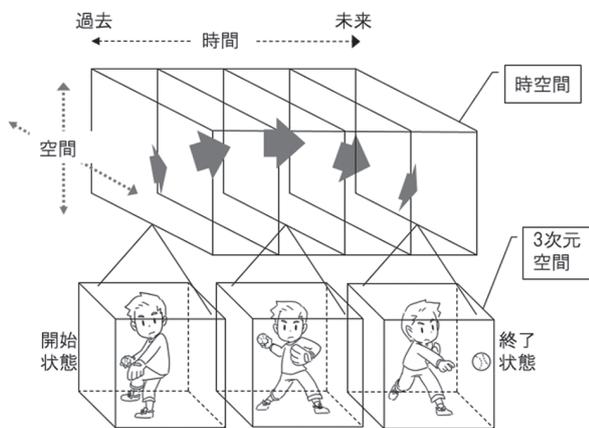


図1 時空間と動き

ヒトは時間の経過を直截には感覚や知覚ができないから、モノの変化を通じて間接的に理解する。モノの変化のあり様を内的表象にすることで動きを解釈している。例えば、視覚系の一部に損傷を受けると静止風景しか分からず運動を認識できないという([10]:60頁)。こうした外界知覚の性質から分かることは、いわゆる動詞の意味(動きの脳内表象)は経験に拠る創造であるということだ。内的表象をもとに記憶力や因果推論力、情動や感情に支えられた信念で作上げたものだろう。同時に、内的表象を、お互いが知覚したり認識したりすることが可能な外形表象とするために情報の内包の意味を持たせ([13]:71頁)、社会的合意のもとで言語公共的な取り決めに沿って音や形を使い外形化していると考えることができる。

2.2 外形存在と機能存在

外界のモノを頼りに我々は動きを認識している。時間

(経過)はモノの捉え方に依存する。大森荘蔵のいう密画化([14]:86頁)を推し進めると、モノはそれを構成する粒子の集合と見做すことができ、粒子はその状態が絶え間なく変化するから、どの時刻においても同一のモノはこの世の中に存在しない。しかし、常識的にヒトの感覚や知覚が持つ認知・認識の分解能を観察基準として採用すると、モノは、(1)暫くの間、外形が変化せず位置が変化する存在物である、(2)暫くの間、機能が変化せず、状態が変化する存在物であると見做すことができる。なお、この説明における状態の変化とは外形が変わったり属性が変わったりすることである。いずれにしてもモノの姿形やあり様が変化するので、脳内で連続的にイメージ変化を捉えることが出来て、動きを創りだすことができる。

本稿では、(1)を外形存在の捉え方といい、(2)を機能存在の捉え方という。外形存在としてモノを捉えて時間の経過を表現する方法を経路表現といい、モノを機能存在として捉えた場合を変化表現という。

表3 存在のあり様

動きの認識	外形存在	機能存在
始まり	位置変化の始まり	状態変化の始まり
続き	位置変化の継続(動作継続)	変化状態の維持(変化継続)
終わり	位置変化の終わり	状態変化の終わり

時間の経過を表す手段としてモノの状態の変化表現も考慮に入れると、表3のように動きの認識に二重性があると考えることができる(なお、動きの弁別、つまり時間の経過に仕切りを設けることを完了という)。

言語学のアスペクト論では「始動、継続、終了」などの用語を用いる。これらの語は出来事(という抽象時間解釈の産物)の諸相を表す。本稿では、包括的な時間認識におけるモノの変化について述べているので「始まり、続き、終わり」という語を使う。

2.3 二重性と表現手段

動きの捉え方の二重性を頼りに、動き、つまりモノの時空間内での振る舞いのヒトの認識について表4にまとめた。

変化の拠る所は、変化を起こす要因を表す。位置変化を起こす動きは力である。状態変化を起こす動きは見做

しである。認知手段とは動きを認識するための用いられる手立てを指す。まず、位置変化の動きの世界では、モノの位置を変化させるには位置変化を起こす（能力を持つ）主体と、どの経路で、どの程度位置を変化させるのか（終点位置）が動きの質を決める。この表現の中心には意図（力と目的）がある。

一方、状態変化の動きの世界では、モノに在る（外形を含めた）どの性質（視点）が、どの程度状態が変化したのか（推察）で動きの質が決まる。共感（視点と推察）が表現を支えている。

表4 動きの世界

動きの世界	位置変化	状態変化
時間の経過の表現	モノの位置の変化を頼りに時間の経過を表す	モノの状態の変化を頼りに時間の経過を表す
変化の拠り所	モノ自身が力を伴って位置変化する。力を加えてモノを位置変化させる。	モノの現状状態を変化の終わりで見做す。モノの現状状態を変化のはじまりで見做す。
主な認知（解釈）手段	意図と（到達の経路による）結果状態	共感と（変化の推察による）結果状態

モノの空間内経路表現を支える表象理解の根本は（空間内を移動する）モノの同一性である。モノが同一であるから経路が認識でき動きが分り、その前後関係もわかる。なお、モノが同一で且つ経路がない場合は、恒常状態を表す（存在表象）。

他方、モノの空間内状態表現を支える表象理解の根本は、（空間内に在る）モノの性質の特定である。変化するモノの性質が特定できることから変化経緯を推察でき、その前後関係もわかる。なお、モノの性質が変化しない場合は、恒常状態を表す（機能・属性表象）。

2.4 モノの見方と動きの表象特徴

モノの見方は動きの認識の礎である。

位置変化（外形存在）の動きの世界は、モノをその外形が変化しない剛体のように扱う。時間経過の間、モノの外形が維持されることを前提に動きが担保される。経路は3次元空間を占めるので、動きの表象に比較的大きな時空間がイメージされる（図2）。

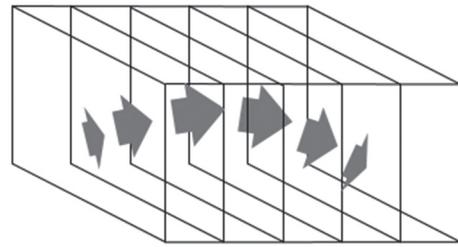


図2 大きな時空間イメージ

位置の変化を頼りに時間の経過を表し、（どの経路を選択するのかという）意図と（経路に沿って到達した着点による）結果状態の表現が基本の動きを表す。知覚現実傾向の時間経過の捉え方が基本である。意図とは目的の源泉であって、現状から目的（状態）に向かう因果性が好まれ、分析的で演繹的な推測を選好する。

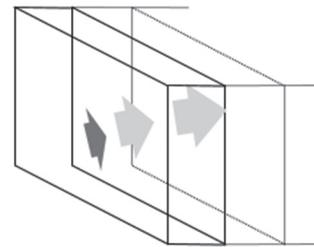


図3 小さな時空間イメージ

状態変化（機能存在）の動きの世界は、モノをその外形を含め性質が変わる弾性体のように扱う。時間経過の間に、モノの状態が変わることを前提に動きが担保される。変化は3次元空間を必要としないので、動きの表象に比較的小さい時空間がイメージされる（図3）。状態の変化を頼りに時間の経過を表し、（どの点（属性や形状）において変化があるのかという）視点と（変化限界の推察による）結果状態の表現が基本の動きを表す。認識想像傾向の時間経過の把握の仕方が基本である。視点は共感に拠って見出すことから、選択的に性質を決める因果性が好まれ、総合的で帰納的な推測を選好する。

3 動きの表象

3.1 モノの表象的意味

英語は、モノの外形存在の捉え方が優勢である。例えば、人称詞は意思性を有する外形存在を表すし、不定冠詞や名詞の屈折語形はモノが外形を持つ存在あることを示す形態特徴である。名詞複数形は外形存在の集合であ

ることを示す形態上の指標である。代名詞は先行する文脈中のいずれの外形存在であるのかを参照する。

それに対して日本語は、モノの機能存在の捉え方が優勢である。体言（名詞）に複数形形態はなく、役割語が多い（人称詞はない）。指示語基ほどのような機能存在であるのかを参照する。モノが固有の外形を持つことを明示する必要があるば類別詞（人、匹、杯など）を使えばよい。また、外形存在を表す表現、「というもの」や「ということ」があって、個別の物事を表す際に、頻繁に使われている。



図4 人称詞のイメージ

図5 役割語のイメージ

図4は英語の人称詞のイメージ図である。4人とも自己の参照に「I」を用いる。相手の参照には「you」を使う。隣の図5は日本語の役割語のイメージ図で、自己を参照する場合も相手を参照する場合にも、その役割に応じて、例えば「お父さん」や「僕」、「わたし」を使う。

上図で女の子はカップを使っている。図4ではカップまで白黒だが、「cup」が表象する意味を確認すると、（外形存在が優勢なので）「コーヒーなどのカップ、茶碗」「大会などの優勝カップや優勝杯」「スポーツなどの大会、カップ」「女性のブラジャーのカップ」などの意味がある。外形が内包する意味に共通していることが分る。日本語では「湯呑、水呑」と言い、水やお茶など飲料を飲むための器である。機能を内包する意味が共通する。

3.2 コトの表象的意味

英語は動詞の意味として「目的のある出来事」として表すことを選好する（[15]:98頁）。要するに動きの表現にあってモノの位置変化が優勢だからである。動作・行為の背後に目的があると想定し、他者（行為に関わる者）がその目的を意図的に為しきる（為し得る）のが基本の意味である。そのため他動性表現が文型の基礎である。動作・行為の前提条件を意識したり、目的状態の違いを明示したりすることがある。

それに対して日本語は、「推察した出来事」として表

すことを選好する。動きの表現においてモノの状態変化が優勢であることに拠る。動作・行為の背後に目的があると想定はするが、意図的であることを保留し、他者（行為に関わる者）の心を理解しようとする（目論み）。その結果、自動性表現が言語表現の土台をつくる。

図6は、ドアを開ける動きをモノ（ドア）の変化で表している。図7は「彼がドアを開ける。」を表している。開ける目論見みでドアノブを握っている様子である。推察からドアが開くことを認識している。「ドアを開けたけど開かなかった。」が（口語ながら）受容される。図8は「He opens the door.」に対応するイメージ図である。「開ける」では、（機能存在の）ドアが開いた状態を推察するのに対して、「open」では（外形存在の）ドアの位置変化（閉まっているドア位置から開いているドア位置までの経路変化）を引き起こす。

目的のある出来事表現の特徴は文型にも顕れる。いわゆる二重目的語構文はその典型である。図9は「He gave a birthday present to her.」が表す意味に対応するイラストである。「a birthday present」は外形存在で、男の子の手元から女の子の手元直前までの経路をその外形特徴を変えずに移動する。

図10では「a birthday present」が女の子の手元に届いている。これは「He gave her a birthday

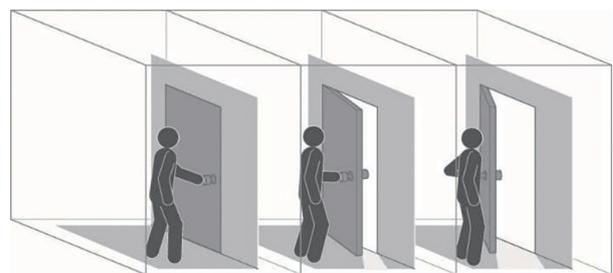


図6 ドアを開ける動き



図7「開ける」



図8 “open”

present.”を表している。経路は同じだが経路長が違うので、時空間の動きは図9とは違う（文の意味が違う）。そして、この文の後続に「でも彼女は受け取らなかった。」は表現できない。

図11は「彼はプレゼントを彼女にあげた。」を表す。彼の行為の背後に目的があると想定はするが、意図的であることを保留し、他者（行為に関わる者）の心を理解しようとする。「プレゼント」は機能存在であり、所有属性が変化することが期待（推察）されているモノである。経路移動を表現する必要はないから外形特徴の表現には無頓着だ。つまり（イラストのように）プレゼントが1個であることもない。一般的な推察では、彼女はプレゼントを受け取っていると解釈する。ただ、これは目論見なので、「そして彼女は喜んだ。」という文も後続する一方、「でも彼女は受け取らなかった。」という文も後続することができる。

日本語には結果状態を明示する（複合動詞の後続）動詞「～切る」「～抜く」「～あげる」「～てしまう」があるから、時間経過を動詞語形として形態的に明示するのであれば、「プレゼントをあげきった／与え抜いた」などと表現できる。ただ、こうした表現はあまり受容されないで、上記の例に挙げたように後続文を使って状態変化の終わりを告げる。そうして出来事（「プレゼント

をあげる動作・行為）の完了を明らかにする。

3.3 コトの表現類型

時間経過に対して不変化である定常状態（結果）を表す動詞（「死ぬ」「腐る」「散る」）や、連続的な動き（「見る」「嗅ぐ」「感じる」）、瞬間的な動きを表す（「触れる」「知る」「分る」）など、感覚・知覚的に動きに区切りを設けることのできない動きを表す動詞は、当然ながら「～したけどできなかった」テストで受容できない。英語でも“love”や“know”は、動きの継続的な側面が表現できないので進行形がない。

時間経過の間、モノの外形が必然的に維持される動きがある一方、逆に状態が変わることを目指す動きもある。具体的には「動かす」「吠える」「歩く」「来る」など外形存在が維持されることが前提で動きを表す動詞がある。例えば、“break”、“make”、“paint”、“pour”などの状態変化を引き起こすことを目途とする動きの表現に焦点をあてた動詞がある²。

動き（時間の経過）の概念を一つの語形形態（例えば単動詞）内に収める必要はない。例えば、自動詞は状態性が強いといわれるが、それは動きの認識において単相（始まりのみ、終わりのみ）を表すからだ。「夜が明けた。」は前日の「日が沈んだ。」時刻が「夜」の時間経過の「はじまり」で、夜中「夜」が続いて、「夜の終わり」を「夜が明けた。」で告げる。つまり「夜が明けた。」は時間経過の終わりを表す単相の表現である。日本では元禄時代、上方で菜種油の生産が拡大して、夜という時間が認識されるようになったという。日が暮れてから夜が明けるまでの時間経過を表す一語動詞を作ってもよいのだろうが、どのような文脈で言語表現を用いるのかわからない。

3.4 コトの表現特徴

時間経過を表すため比較的大きな時空間イメージを持つ英語は経路の多様性を表現する語彙が多い。例えば、“skirt”（「周辺を通る、避けて通る」）のように直截に日本語動詞に対応しない動詞は多い。さらに句動詞はその典型で、経路の多様性を支えるのは30近くもある不変

2 こうした動詞はいわゆる結果構文で現れる。モノの見方が外形存在を基本にしていることから、終わりの状態が明示されないと時間経過が表せない。

----- (時間の経過) ----->



図9 “give”



図10 “give”



図11 「与える」

化詞である。“skirt around”に「回避する」という日本語訳を割り当ててもその表現イメージは伝わらない。

英語はモノの外形存在の捉え方が優勢なので、知覚現実傾向の時間経過が強く意識され、時間の先後関係を示す語（接続詞や従属句）や文型が発達している。「～するとき」は点的な出来事と持続する出来事を区別しないが、この区別を意識しないと“when”と“while”が使えない。

仮想表現は現在という抽象時点を設け、直線的な時間軸を想定し、その前後関係を使って非現実の世界を表現する。

さらに状態の変化を移動で捉える（[15]:92頁～98頁）。スティーブン・ピンカーは、『ある「状態」は、いくつもの状態が可能な空間における一つの位置として捉えられ、「変化」はその〈状態空間〉のなかで、ある位置から別の位置に移動することと同じだとみなされるのだ。』（[15]:99頁から引用）と説明する。例えば、“He went from sick to well.”の例を挙げ、移動概念を使って、Heの状態変化を表していることを説明する。さらに典型的な例として「壁にペンキを塗る」や「干し草を荷車に載せる」など、壁や荷車は状態が変化することを指摘し、ある状態の空間を外形存在のように見做していると説明している。

4 小さな時空間

4.1 平面的な解釈世界

九鬼周三は19世紀初めに、東洋的時間の解釈として現在に重点を置く時間論を展開している（[5]:17頁、351頁～370頁）。池上嘉彦は『単純な〈場所の変化〉であれば、〈変化するもの〉はその位置が変わるだけそれ自体は本質的な変化は経ていない。しかし〈状態の変化〉であれば、〈変化するもの〉をその一要素として含む全体的な状況は変化の前と後で有意義的に変わっている。このため、〈状態の変化〉は常にその前の状況（および場合によってはこれから生じる状況）との対比を必然的に含むものであり、それ故に「時間」の経過の意識から逃れることはできない。』（[16]:263頁から引用）と指摘し、時間経過と状態変化の関係について指摘している。

モノは存在するため3次元空間を必要とする。した

がってモノの存在認識を通して時間経過を意識することが、動きの概念を創り出すことにつながっていると考えられる。用言や動詞に動きの意味があるというより、むしろ、動きを生じさせるモノが基本にあって、モノの解釈の仕方と変化のあり様、そして、その組み合わせで動きの意味が創造されるのだろう。

4.2 解釈の特徴

小さい時空間イメージを使う日本語は、日本語の動詞で基本的に短い時間幅の動き³の意味を表す。動詞が表す行為や動作の時間的な大きさが基本的に小さい。「～ている」が「ある、いる」など例外を除き、ほぼすべての動詞に接続するなど形態アスペクトの仕組みを持つ。副詞にはその動詞の時空間的な大きさを拡大する働きがある。

上記から分かるように日本語には変化の始まりと変化の終わりを表現する語彙が多い。「する」と「なる」はその典型で両方の変化表現に使うことができる。また複合動詞の後項動詞「かける、かかる」は始まりの表現に使い、「切る、抜く」などは終わりを表す表現である。例えば、「かける」「かかる」を使った複合動詞を含む文は、英語や中国語に直訳することが難しい。英語のように知覚現実傾向の時間の経過を選好すると、動きの始動部分は瞬間的になるから表現し難いのだ。認識想像傾向の時間経過で捉えれば、ハイスピードカメラのような推察を動きの解釈に持ち込むことができ、動きの始動部分を表現しやすい。

また、変化限界の推察によって時間経過を補完していること、モノの捉え方について機能存在を選好することから、述語の連体形がモノを一元的に制限（修飾）できる。モノに対する機能限定をモノの外形や属性さらに推移的関係性といった特徴区分なしに連体形語形だけで行うことができる。そのため日本語の連体修飾表現の英語への翻訳は難しい（[17]）。

オノマトペはどのような言語にも見られる現象である。しばしばオノマトペの数の多さが日本語の特徴として挙げられ、日本語はオノマトペが発達しているといわれているが、それは動詞の時空間特徴と強く結びついている。動詞の基本的な意味が短い時間幅の動きに集中し

3 瞬間ではない。

ているので、動作の仕方（様態）の意味を含めることができないのだ。必然的に動作の様態を示す表現がオノマトペなどの副詞として発達することになる。行為や動作の時間的な大きさが小さく、あまり複雑なことは表現できない。そのためオノマトペを含め副詞と呼ばれる語群を使って、空間的にあるいは時間的に動きの表現を拡大している。

なお、漢語動詞（サ変名詞）は、中国語からの借用が多いから、語が表す動作や行為の意味に意図（目的）を内在している。したがって、「～したけどできなかった」テストで受容できない場合が多い。

4.3 状態変化とその翻訳

日本語は状態変化表現が基本にある。前の文にあるように「〔対象〕ガ〔視点〕ニ〔評価述語〕」という表現形式である。述語部分で、存在と非存在（「ある／ない」）を表したり、状態変化したこと（させたこと）「～になる／～にする」を表現したりする。状態を表す形容動詞を使った表現も多く、状態性の強い動詞のテイル形（例えば「困っている」「気づいている」）なども用いられる。

以下では「～になる」と訳される若干の英文例を挙げて違いを示す。

“How much do today's sales add up to?” は「今日の売り上げは全部でいくらになりますか。」（[18]：290 頁）である。売り上げは個別商品の販売額の累積なので “add up to”（「合計～になる」）を用いている。“Revsing up (the engine) annoys the neighbors.” では「エンジンを吹かすと近所迷惑になる。」（[18]：284 頁）と訳される。名詞述語「迷惑だ」に対応する annoy は「うるさがらせる」という他動詞である。

“You should buy dresses for your daughter that are a bit big. That way, she will grow into them.” は「娘には少し大きめの服を買ってあげなさい。そうすれば大きくなって服が着られるようになるでしょう。」（[18]：253 頁）である。“grow into” は「成長して～になる」だが外形存在が意識され同一物が相似形的に変化することが含意される。

“Plan before starting. If not, you'll run into trouble.” は「スタートする前に計画を立てなさい。さもないと困ったことになるよ。」（[18]：171 頁）で、移動によって状態変化を表す例である。“Wind the

tape forward until you come to 0945.” を「カウンターが 0945 になるまでテープを早送りしてください。」（[18]：134 頁）と訳する。日本語文が与えられ、それを英語へ翻訳することを考えると難しい。“until the counter becomes 0945” ではカウンターが変身したようで可笑しい。

“That will help minimize any possibility for misunderstanding.” は「そうすれば、どんな小さな誤解も食い止める助けになると思われます。」（[19]：201 頁）である。無意志の主語を使った作用表現で、状況が変化することを動きで表している。有意志の人称詞を使った例は、“You can rely on me.” 「いつでも力になれる」（[19]：168 頁）である。can 以外にも will や should が用いられた場合、自ずと状態が変わることや、状態実現が不可避で必ずそうなるといった意味で「～になる」という翻訳例を見出すことができる。

英語の不変化詞の中で、頻りと状態表現に使われる out や over について若干の例をみよう。

“The stadium was absolutely packed out with people.” は「スタジアムは人でぎっしり満員だった。」（[18]：279 頁）である。「ぎっしり満員だ」ということは、人が次々とスタジアムに入場したのだということを知覚想像から帰納的に推察できるが、英語表現は pack（～を詰め込む）と out から知覚現実に人の外形存在（“with people”）を利用して表現している。“The master cast his disobedient disciple out.” は「師匠は言うことをきかない弟子を破門した。」（[18]：234 頁）となる。expel（「除名にする」）という抽象的な概念語よりも “cast out”（「社会から人をのけ者にする、追放する」）という知覚現実に沿った語彙を用いている。

英語のモノの外形存在から拡がる表現の多様性は、日本語の機能存在を中心とする表現の仕組みからは分かり難い。英語でモノの知覚的な存在から動きを示す表現を、日本語表現とする場合、先ほどのオノマトペを使うなどして出来事の個別化を通じて表現することになる。例えば、“He slammed down the book on the desk with a loud crack.” は「彼はボタンという大きな音を立てて、その本を机の上にたたきつけた。」（[18]：266 頁）と訳する。モノの存在から直接に出来事を想起する “with a loud crack” を、具体的なモノが関係する個別状況として表現している。つまり「バタ

ンと大きな音を立てて」と言い換えている。副詞を使うことで状況の個別ができるから、“The plane touched down, and then there was a loud bang.”も「飛行機が着陸し、それから大きな爆発音がした。」（[18]: 266頁）のように訳する。

例えば、ごくごく初学の段階で学ぶ“sea”は「海」だが、場所としての知覚現実的な存在を中心に意味が拡張することから「海岸」や「波」を表現するし、形容詞として「海の、海辺の、海岸の、海に関する」という意味の他に、「船の」や「海軍の」という意味まである。「海」から「波」を認識想像することは可能だが際限がなくなる。

5 おわりに

日常生活の中でモノの位置変化はわかりやすい。それに対してモノの状態変化は、瞬間的であるか、もしくは長い時間をかけて起こる。このことから一般には、状態変化を時間経過の手段として言語表現化するの難しい（と思われる）。しかしながら、本稿で見てきたように日本語は体言の表す基本の意味をモノの機能側面に当てていること、そして共感と推察という手段を介在させることで状態変化の表現を数多く用意している。代わって、貧弱な格助詞の数から分かるように経路表現に乏しい。ただ、これは日本語の専売特許ということではなく、時間経過を通じて動きを表す際のモノの見方の選好に拠る。程度問題である。

言語類型論的な観点で、知覚現実か認識想像とか、演繹推論的な表現か帰納推論的な表現とか、あるいはモノの外形存在か機能存在かといった解釈概念はない（[20]）。こうした概念は広く言語システム全体にいろいろな実現形式で偏在する性質だからかも知れない。形態変化や文型類型などのように集中して顕れるような特徴でないのだろう。ただ、意志については広く議論されているし、共感も前者ほどではないが取りあげられることがある。

例えば、日本語に類似点の多い朝鮮語は、「は」と「が」に対応する表現があったり語順が類似したりする。名詞に複数形もないという。しかしながら、ほとんどの名詞に添加して複数であることを示す接尾辞（「들」）を持っている。日本語と同じ膠着語システムのシステムを持つチュルク語やトルコ語（[20]）には形動詞という日本語の

動詞連体形に似た語形がある。関係詞を介さずに名詞を修飾できる。しかし名詞の複数形がある。モノの見方の選好が異なるとある意味、言語間距離が遠いと考えられるが二値分類的なものではなく関与する要因は多岐にわたり複雑でもある。

ところで、表1と表2で示した時間経過の捉え方の二重性は、テンスやアスペクトとも深い関わりを持つ。理性によって創造した解釈世界の報告と、感覚・知覚で把握する現実世界の報告に言語表現を分けることで、語りの文法と話しの文法を構築できる可能性を孕んでいる（[21]）。稿を改めて報告したい。語りの文法視点で日本語を見直すことは、現在、産業日本語研究会・ライティング分科会で議論している日本語マニュアルの充実につながる。

参考文献

- [1] リチャード・モリス 荒井喬訳、時間の矢、地人選書、1987.
- [2] デヴィッド・ドイッチュ 林一訳、世界の究極の理論は存在するか 多宇宙理論からみた生命・進化・時間、朝日新聞社、1999.
- [3] ジョン・エリス・マクタガート 永井均訳、時間の非実在性、講談社学術文庫、2017.
- [4] 大森荘蔵、時は流れず、青土社、1996.
- [5] 九鬼周造著 小浜善信編、時間論、岩波文庫、2016.
- [6] 池谷裕二監修、【大人のための図鑑】 脳と心のしくみ、新星出版社、2017年.
- [7] 小野武年、脳と情動 —ニューロンから行動まで—、朝倉書店、2012.
- [8] 久保田競編 松健謙一・船橋新太郎・櫻井芳雄共著、記憶と脳、サイエンス社、2002.
- [9] 久保田競編著 虫明元・宮井一郎共著、学習と脳 器用さを獲得する脳、サイエンス社、2007.
- [10] デヴィッド・イーグルマン著 大田直子訳、あなたの知らない脳——意識は傍観者である、早川書房、2016.
- [11] 中島義道、カントの時間論、講談社学術文庫、2016.
- [12] 入不二基義、時間は実在するか、講談社現代新書、2002.
- [13] S.I. ハヤカワ 大久保忠利訳、思考と行動における言語、岩波書店、1985.
- [14] 大森荘蔵、知の構築とその呪縛、ちくま学芸文庫、1994.
- [15] スティーブン・ピンカー著 幾島幸子・桜内篤子訳、思考する言語（上）、NHK出版、2009.
- [16] 池上嘉彦、「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論、大修館書店、1981.
- [17] 猪野真理枝 佐野洋 馬場彰、英作文なんかこわくないⅢ 連用修飾編、東京外国語大学出版会、2015.
- [18] クリストファ・バーナード、英語句動詞文例辞典—前置詞・副詞別分類、研究社、2002.
- [19] ロッシェル カップ、ビジネスミーティングの英語表現、The Japan Times、2001.
- [20] リンゼイ J. ウェイリー（著） 大堀壽夫他（訳）、言語類型論入門、岩波書店、2006.
- [21] 坂部恵、かたりー物語の文法、ちくま学芸文庫、2008.